

アトリエ 琉游舎 だより 76号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

2020年4月8日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

改過自新 転禍為福

- 「過あやまちを改あらため自みずから新あらたにす」「禍わざわい転てんじて福ふくと為なす」
- 世界中が目に見えない敵との戦いのさ中、挙国一致、強いリーダのシップの下、各国のトップが直接自国民に語りかけています。その主張は明快で強い意志に貫かれています。「おまえたちの命は守る だから俺の言うことを聞け 聞けないやつは許さん！」
- 「我が国では法律的な根拠はない（なら作ればいい）」「そんなことをしたら経済が持たない（死んで花実が咲くものか）」「もしうまくいかなかったら誰が責任を取る（あなたです）」「要請に強制力はないが命令に準ずる（だからどっちなのよ）」「レストラン内の花見は自粛されている花見とは違う（その一言で誰もあなたの言葉を信用しません）」「補償よりはまずは各戸マスクを2枚配布せよ（予算がありません これを勘弁して）」
- 各国のリーダーはこの戦いを明確に戦争と言っています。指揮官があほやから戦いできへんと言ってもこの戦いを避けうる場所は世界のどこにもありません。さてどうしたものか。
- 私たちは過ちを犯す生きものです。同時に自ら過ちを認め反省しそれを繰り返さないために思案し工夫を凝らして前に進んで行く生きものでもあります。過ちをマイナスのままにせず、必ずプラスに変えていく知恵と意志の動物です。「改過自新 転禍為福」です。
- 具体性のない空虚な言葉の羅列と開き直りには「改過自新」はありません。つまりは「転禍為福」も望めないということです。詭弁と厚顔無恥というもう一つのウイルスが、今日本人の知恵と意志を蝕んでいます。蔓延するこの二つの新型ウイルスに負けない為に、皆さん「改過自新」を怠らず、禍を福と転じるよう、そして自身と愛する人を守るためにこの難しい日々を皆で気遣い助け合いながら乗り切っていきましょう。

木 金 土 日

4・5月スケジュール

月	火	水	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
	読書会 13時半		映画会 13:30		詩話会 13:30	
20	21	22	23	24	25	26
			映画会 13:30		居酒屋の会 16時半	
27	28	29	30	5月1日	2	3
	読書会 13時半		映画会 13:30			写経会 13:30
4	5	6	7	8	9	10
			映画会 13:30		詩話会 13:30	
11	12	13	14	15	16	17
	読書会 13時半		映画会 13:30			

読書会

4月14日(火)
4月28日(火)
13時半から

詩話会

4月11日(土)
5月9日(土)
13時半から

写経会

5月3日(日)
13時半から

居酒屋の会

毎月25日
16時半から

ちょうど一年前の今頃新しい年号「令和」が発表されました。先日法話のさなかに「令和になってこの一年、悪いことばかりが続く不安です。この不安をどう払えばよいのでしょうか」と質問されました。確かに台風による大規模な停電、洪水被害、そして目下のウイルス感染症。それに詭弁強弁を繰り返す政治家への不信を加えてもよいでしょう。自然災害は今までの備えを遙かに上回る被害をもたらす、目に見えない敵ウイルスとの戦争はいつ止むとも知れません。いつの時代も人々を不安に陥れる災害や変事がありました。そんな時その時々人は「時代の不安」ともいふべきその現状をどう理解し解決してきたのでしょうか。

古来日本人、特に鎌倉時代のころまではこれら時代の不安をもたらす自然災害や動乱などを「怨霊」の仕業と考えてきました。「怨霊」とは憎しみや怨みをもった人の生霊と非業の死を遂げた人の死霊のことで、この怨霊が生きている人に災いを与えるとして恐れられていました。私はこの考えを非科学的な迷信と一笑に付すことをしません。人は今起きている災いから逃れるために、必死になってその理由を探り解決策を考えます。そしてその災厄の原因とそこから逃れる方法を人々の共通認識として形にまとめ、実行し人心を安からしめることがかつての日本のまつりごと（政治）の基本でした。怨霊を「祀り」怨霊の恨みを鎮めることは重要な「政（まつりごと）」なのです。その考え方を現代人の知識でもって排除し愚かなことと蔑むことは厳に慎むべきです。怨霊の怒りを鎮めることで今ある災厄から逃れることが出来ると「信じる」こと、これが当時の人々が時代の不安から解放されるための手段でした。だから時の権力が怨霊を鎮めるために寺や神社を作り祈祷を行い布施をしたことは全く合理的な「まつりごと」なのです。

少しさかのぼり鎌倉時代の半ばになって、日蓮上人は怨霊を祀ることで「時代の不安」を取り除く方法に代えて、新たに妙法蓮華経（正法）による政（まつりごと）を幕府に諫言しました。^{注1}いずれの方法も「何が（因）その災い（果）をもたらしたのか」という思考方法によって分析された論理的帰結です。仏教用語で言えば「縁起」と言うことです。すべての存在は原因（因）と条件（縁）によって成立（果）すると言う考え方です。「因縁」や「因果応報」と言えば分かり易いでしょう。いずれも現代から見れば根拠とするものが非科学的で迷信や独善的な論理に見えますが、それは現代人が持っている科学的成果から見た判断です。後付けの知恵で過去の方法を否定することはフェアではありません。当時の人にはとても合理的で説得力のある考え方であったのです。ですから人は怨霊を祀る方法を支持し、正法に寄って国を治める方法に理解を示しました。時代の不安の原因をつきとめそれを取り除くことで人々を不安から解放し、人心を安らかにすること、それがまつりごと（政治）の役目です。時代の不安はその時代への不信に根ざしています。不信を信に代えることができれば人心は安定します。人が不安の中で生きることがとてもつらいことです。だから人は信ずるものを求めるのです。「信」は生きることの安心の柱です。いつの時代も不安を取り除くために宗教家や政を行う人は、人々に安心の方法を提供してきました。そしてその方法に「信」を置くことが出来たときに初めて人は不安を払い安心の中に生きることが出来たのです。令和の時代が不安の時代と今私たちが実感しているならば、その「不信」の源は何であるか？そこを突き止め取り除き「信」ずべき安心の柱を示すこと、そしてその通りに行くことが政に求められていることは言うまでもありません。それが政治家であるのか宗教家であるのか、人は「信」ずべき「まことの言葉」と「行い」を不安の中で待ち望んでいます。

ここから令和の怨霊の話をしていきます。オカルト話に抵抗のある方はここまでにしてください。「令和」の年号は万葉集の梅の花の歌三十二首の序文にある『初春の令月にして 気淑く風和ぎ 梅は鏡前の粉を披き 蘭は珮後の香を薫らす』から引用されたものです。当時首相記者会見で「人々が美しく心を寄せ合う中で文化が生まれ育つ」という意味が込められ、また初めて漢籍ではなく国書に典拠があることを誇らしげに語っていた記憶があります。ところがそこに敢然と異を唱えた万葉学者^{注2}がいました。要点だけを述べます。天平19年に天然痘が大流行し最高権力者藤原武智麻呂ら4兄弟が立て続けに発症し死亡したことがありました。当時彼らの陰謀で抹殺された長屋王の怨霊の祟りであるという観測が流れたのです。令和の年号の典拠となった梅の花の序文は、長屋王抹殺以降完全に権力を掌握した藤原一族に向けて「長屋王抹殺の事実を俺たちは（大伴旅人）知っているぞ」というメッセージを放っているのです。この寄稿文で品田教授はこの隠された刻印を見事に学問的に解明しています。なんと「令和」という年号によって「権力の横暴を許さないし忘れない」という梅の花の序文が、長い沈黙から今、蘇ったのです。さあ大変です。今まで万葉集の中に眠っていた権力告発の矢が令和を生きる私たちに向けて放たれ、それは同時に長屋王の怨霊をも目覚めさせてしまいました。定説ではありませんが、国家鎮護の寺東大寺も万葉集編纂（大伴家持）も真の目的は長屋王怨霊鎮魂のためと言われています。さて、この蘇った怨霊が誰に祟るのか、少なくとも権力なき我々民衆に祟ることはありませんが、権力を独占し専横に振る舞っている人たちには祟る可能性があるでしょう。急ぎ鎮魂しなければなりません。もちろんそれは祈祷や寺を建てて怨霊をなだめることではありません。ましてや「マスク二枚で新型コロナ退治！」では「竹槍でB29を撃墜！」とほぼ同じ論理ですからこれでは不信を「信」に変えられないことは長屋王の怨霊も承知のはずです。怨霊の怒りは人々の不信が高まるほどに力を増していくでしょう。今、かの怨霊も私たちも望むことはただひとつ。「まことの言葉 琉游舎：戸井 出琉・恭子（信）」を早く聴き、安心の日々をこの手にもたらしただけなのです。